

令和 7 年度 第 1 回 川崎市岡本太郎美術館部会 会議録

■日時 令和 7 年 10 月 9 日（木）14:00～16:00

■場所 川崎市岡本太郎美術館 創作アトリエ

■出席者

委員 加藤弘子、杉浦幸子、橋本善八（部会長）、藤嶋俊會

事務局 土方（館長）、佐藤（副館長）、佐藤、片岡、重森、石原、五十嵐、喜多、加藤、
澁谷、細川、千村、鈴木、
小山（指定管理者）、山内（指定管理者）

■傍聴者 0 名

■議事

・令和 7 年度 事業経過及び予定について

- 1 展覧会事業
- 2 資料収集・整理、調査研究
- 3 作品の保存・修復、貸出
- 4 普及企画
- 5 広報活動
- 6 施設・設備の整備
- 7 その他

・その他

■議事録

○開会

【土方館長挨拶】

【配布資料確認】

【会議公開・議事録作成に関する説明】

事務局より全委員の半数以上である 4 名出席により、会議の成立を報告。
傍聴希望があった場合、公開とする旨を確認。

【橋本部会長挨拶】

【事務局より議題 1（展覧会事業）について説明】

加藤委員： 本当に頑張っていると感じている。一番暑いときでも入場者数があることを見ても展覧会に魅力があり、発信もきちんとされていると思う。今年の展覧会はどちらも踏み込んだ問題について展示されていて、今の時代の課題と関連した内容であるということが興味をひいたのだと思う。特に原爆展は、今朝の段階でもロシアが原爆について言及するというような時代の中で、もう一度考えて見なければならないという切迫感もある。そういった中で非常にタイムリーな展示を考えている。

藤嶋委員： 最近岡本太郎を見直している。我々の世代は岡本太郎をちゃんと評価していなかったのではないかという感じがする。最近、太郎の『母の手紙』を読み直した。母親かの子と交わしたやり取りをベースにしたもので、太郎のすべてが書かれている。太郎のメッセージを踏まえてなんでもやれるとも思えるし、また、何か違った視点がないかとも考えている。万博については今やっている建築の粋を集めたものと太郎さんの手作りのものを比較してみてしまう。今やっている万博がどの様に残るかが気になるし、やはり手作りのほうがじわじわと内容的にはしめるのではないかという気がしている。原爆の絵はリアルに表現されていて、我々でも対峙してみるのはむずかしい。伝えるということでは、私は戦争直後に映画を通して伝えられた世代だが、このような伝え方も重要だと思った。では現代作家はどうかというと、実際に戦争を経験もしていないし、色んな情報がある中で考えてプレゼンテーションをしていると思う。深く掘り下げているものもそうでないものもあったが、違う伝え方をしているのだろうと思う。

杉浦委員： 今回はすべての展覧会を見ることができた。万博展と同時に開催していた常設展はお客様が楽しそうに観覧されているのが印象的だった。常設展と企画展に分かれてはいるが、万博展は華やかで賑々しい感じがして、その前に見る展覧会として常設展が考えられており、構成がとても良かったと思う。岡本太郎は今は亡くなられてレガシーとなっているので、作品もちろんそうだが、人となり伝えるということ、人柄や生活の中から彼を伝えていくことは大切だと思う。そのためにはファッションや何を食べているかというような視点はすごく重要と考えているので、さすがだなと感じた。

万博展の方は、民族資料展示と反対側にある現代アートの展示の緩急みないなものがとても印象が良かった。太郎さんは民族学も現代アートもというところがあり、そのことが万博という大きなテーマの中で良く伝わる内容であったなと思っている。また、スタンプラリーについてだが、ちょっとした「つなぐプログラム」というようなものが展示の中に織り込まれているということが、とても良かったと思う。緩急取り交ぜることが今後の展覧会のデザインには必要だと考えている。作品を軽視することなく、それと絡めながら楽しいスタンプラリーにつなげられているというのは、つなぐプログラムが機能していると思う。展覧会のタイミングも非常

に良かった。

原爆展については、知人の中学生のお子さんとその友達を連れて見に来た。彼らがどういように見るかを知りたいと思っていた。彼らは平和教育を受けていて、この展覧会を予習し・展示を見て、広島へ行くという3段階の学びをすることにしたそうで、この展覧会を観てから広島を訪問している。広島出身の芸術家でもある子供たちの親からは、「広島訪問がアートという文脈が差し込まれたことで単なる観光ではなく、深いものになった」といように聞いている。また、基町高校の展示を見ていた時、小さいお子さんを連れた人がいて、これは見ないようにしようと言って連れて出したシーンを見かけた。親の判断というものが出てくると思う。厳しい表現に親も向き合いたくないという気持ちも出たのかもしれない。こういう事も含めチャレンジングな展示であったと思う。見た方の意見をアンケート等でも拝見したいと思っている。基町高校のトークイベントはどのようなイベントであったのか。現役の高校生の出演はあったか。

事務局： 現在は大学生や社会人になっているが基町高校の卒業生で、実際に絵を描いた方たちに来てもらい、高校での取り組みや自分が作品を描いたときのことを詳しく話してもらっている。山田先生のイベントは、基町高校の卒業生の話を聞いた後、制作のワークショップをするものであった。現役の高校生は話してはいない。卒業生の方たちの中には各地で話をする活動されている方もいて、今回は関東だけでなく広島や名古屋からも来ていただき話をしてもらっている。

杉浦委員： 先程話した中学生のお子さんの父親は長崎出身で、長崎では「原爆が落ちた日には町中で黙とうをするが、東京に来たら誰もしていないのでびっくりした」と話されていた。被爆地とそうではないところとの意識の差がある。それはこちらでの原画の展示が初めてであったということにも出ているのではと思った。そういう事からも厳しい造形的な表現であったと思う。また高校生の描いた作品は生々しい感じがして、上手に描こうというのではなく、語ったことを出来るだけ素朴に出そうとすると、ああいうものになるのかなと感じた。

事務局： 高校生たちは、証言者といわれる被爆者と一対一でコミュニケーションをしながら描くが、卒業生はその時、自分が証言者の手となるように描いたと話す。下書きを書いては、ダメ出しをされながら、証言者の中の記憶のイメージをなるべく忠実に書くということを意識したという。話をした卒業生の一人は、「証言者が焼けた人間が丸太のように見えたと話されるので忠実に描くと、学校の先生からは、人間の体としてはこれはおかしいじゃないかというように指導される。しかし、その証言者の方の丸太に見えたというイメージになるべく近づけたいと敢えてそういう風に描いた」という。そのため、ものによっては稚拙に見えるかもしれないが、証言者のイメージに忠実に描くようにしたことによるところもある。

杉浦委員： 本学にも進学してきている高校生がいるが話すと意識が違うと感じると

きがある。私はこの活動については知らず、今回初めて拝見した。高校生にとってもかなりきつい現場だろうとは思いますが、展示を通して平和を考えるとことは美術館だからこその活動であり良かったと思う。

事務局： アンケートでも原爆の絵に関するメッセージが多く、「良かった」「もっと広めてほしい」「またやってほしい」等の意見があった。

お子さんの鑑賞についてだが、展示室で小学校に上がる前位のお子さんに母親が原爆の絵について話しかけながら鑑賞しているところを見た。やはり親の考え方というのは大きいのかなと感じた。また、中学生くらいの子がグループでじっくり見ている姿もあった。小学校で平和教育を受けているので中学生くらいになると意識を持って来館する子供たちがいるということを感じている。

杉浦委員： 李さんが朝鮮大学校出身ということだが、当校の袴田先生が油絵学科と朝鮮大学校をつなぐ活動をされている。現在トークショーをされたりと活躍されているが、こちらでもしっかり展示されていて良かった。

館長： いろんな考えがあるとは思いますが、私は公立美術館の役割がゆらいでいると思う。社会教育機関という原点をもっていないと公立美術館の役割が果たせない。この終戦・原爆投下80年というのはかなり意識していて、着任してから何かやらなければならない、やりたいと考えていた。たまたま基町高校の話が来て、それが起点となった。いつもスタッフと話していることは岡本太郎や今回起点となった基町高校、原爆をいかに美術というものの力によって現代と接続させていくかということで、担当学芸員もそこを意識し工夫して、現代作家のリサーチも行い、今の展示になった。確かに、基町高校の生徒が描く作品はリアルで生々しい。しかし、この現代においてもっと陰惨な映像や画像、アニメなどが氾濫している中で一線を画していると思う。その辺りをどうとらえていくかはこちらがお仕着せできない。捉える方が色んな反応を示すがそれは仕方がない事であろうと考える。

橋本部会長： 戦争の体験者が後10年もするとほとんどいなくなる。子供のときに体験した人でさえも90歳近くなっているという中で、平和つまり普通に日常生活を営める社会を守っていくことの重要さが薄らぎ、当たり前になってしまっていることに一石を投じる展覧会であったと思う。展覧会を観ているとき、近くの人が泣きながら高校生が描いた作品を観ていた。私は基町高校の絵の部分が一番良かった。現代の平和教育がどの様にされているかはわからないが、私は中学校の時に勧められた原民喜の『夏の花』を読んで長崎の原爆資料館に行った。生々しい展示に衝撃を受けた。

広島出身の妻は平和教育を徹底的に小学校から受けていていろんな話をする。小さい頃から平和について考える機会を持つということはすごく大事なことだと思う。先程、高校生たちは証言者にダメ出しされながらも、うまく書こうということではなくその人の手になって描いたという話もあったが、解説のパネルの中には「自分たちは体験者でないのにこういう

絵を描いていいのかという疑問を抱きながら描いていた。」とあった。泣きながら描いていたのではないかと思いながら作品を観た。そういう深いものを感じてもらえる機会と思う。ただ、それから目をそらすということは「いけないこと」というより、むしろ今の世の中の趨勢からは普通なのかもしれない。館長が言っていたように社会教育施設として、家庭教育でもなく学校教育でもないところをどう補っていくかということを非常に考えさせられる展覧会であった。問題作だと思う。証言者がいなくなっていく中で2代3代と続いていく次の証言者、親が若い頃に戦争を体験しそれを聞いてきた最後の年代もやるべきことがあるのではないか、また、増々証言者がいなくなる中で文学や美術や演劇という領域がどういう役割を果たしていけるのか、薄まってしまわないようにしなければならないと強く感じさせてくれた。

【事務局より議題2（資料収集・整理、調査研究）から議題8（その他）について一括して説明】

杉浦委員： 教育普及活動について。インフラの問題は大きく影響するところで、運転手不足によるバスの問題など交通手段の有無や食事をする場所の有無等で全く状況が変わってきてしまうといった中で活動が続いているのは素晴らしい。

今度、3年間展示室が閉じることになるが、例えば中1の人が高1になるまで鑑賞体験がなくなるということでどういった影響が出るのかについて関心がある。鑑賞体験がないからこうなったという因果関係を出すのは難しいと思うが、研究の視点からすると、空白の3年間は貴重な時期であったという結果になってしまうのではないか、また、空白の時期がかえって太郎さんや美術館の重要性を炙り出すことになってしまうのではないかとも思っている。そのようなこともあり、休館中の活動については非常に関心を持っている。

「青春×芸術」や「高校生向けのキャリア検索」についてはどうやって告知したかも気になるころではあるが、ニーズはあると思う。学生からではなく直接親御さんから連絡があったという話が出たが、大学でも親御さんから直接連絡が来る。保護者の意識が非常に上がってきていて、格差が広がっている。社会教育施設としてある種の貧富の差や情報やアクセスの格差があるところをどうやってすり合わせていくかということが重要。視覚障害を持つ石井さんのイベントのように色々な形でアクセスを作っていくということを3年間の休館中にアウトリーチ等でされていくのだらうと思っているし、今やっていることをさらに拡張していくことが出来るのではないかと思っている。

広報に関しても色々な手立てをしていて素晴らしいと思う。

タローマン人気がすごいが連動しての広報はあるか。

館長： 元々タローマンは、NHK主催の大岡本太郎展のスピンアウトの様なもの。

NHK そのものは収益を上げられないので、今は外部委託のような形で進行している。岡本太郎を知らない年齢の子どもたちにもタローマンの人气があり、講演に行ってもタローマンの話が良く出る。これを奇貨として岡本太郎にフィードバックさせようというのが今の美術館のスタンス。現在 PARCO でタローマンの展示をしているので、スタッフが当館での展示について NHK に交渉していて、常設展のときに同時開催する予定。岡本太郎自身が目指していたのは、美術というものは社会的事象であり、一握りの人のものではないということで、ぜひタローマンを入口としてどんどん皆さまを引き込んでいきたいと思っている。スタッフもそれをよくわかっていて、積極的に活用しようと動いている。

藤嶋委員： 万博展と原爆展の広報は非常に力を入れていると言っていたが普通の広報戦略とは違うのか。

館長： 広報担当はいつも工夫してやってくれるのでいつも感心している。どの展覧会も力を入れているが、今回はタイムリーな企画であったので受ける側のマスコミが今まで以上に扱ってくれたというところもあるのではないかな。万博展も原爆展もどうしてもこの時期にやりたいというのが当初からあり、そこにはマスコミが当然注目してくれるだろうという目論見もあった。

事務局： 広報戦略で言えば、例えば、原爆展では中高生に出来るだけ見てもらいたいということがあった。そのため広報の方でそれに焦点を当てて調査をして、ABEMA（インターネットテレビ局）の 10 代に人気の番組内で CM を打ってみるという提案があり、今まで活用したことのない媒体で敢えて若者に仕掛けていくという施策を実施した。結果として視聴完了率 97% という数字が出て担当としても驚いているところである。

加藤委員： 広報についてだが、ターゲットの絞り方が確実にできている。単に狭めるのではなくいくつかに対象を絞りつつ、どこに広報を出すかによって全体に情報が届くように計画的に実行されている。予算は委託料の中に入っているのか。

事務局： 広報は指定管理委託料に含まれている。これには指定管理に必要な他の費用もすべて入っていて、その中に広報費も含まれている。

広報費には、市側が制作する展覧会のチラシ以外の情報誌の制作を含めた広報活動費用として固定した額があり、そのうち有償広報に割ける予算は年間 50 万円。その中でコストパフォーマンスの良さを考え使用している。

加藤委員： 以前自分の所属していた美術館では、大手広報会社に委託をした際の成果のフィードバックの指標に掲載を有料で行った場合いくら位になるかを用いていたが、それと比較するとこれは 10 倍以上の成果ともいえる。経費的なことを考えても大変すばらしい広報を展開されていると思う。

全面閉館ではないという説明があったが、空調の設備工事を伴うとすると収蔵作品は移動させないといけないと思うが作品管理はどうなっているか。また、期間中にコレクションを別の場所等で公開をすることは考えてい

るか。作品を観られなくなるということに関して、閉館中の事業として計画していることはあるか。

事務局： 工事設計が進行中でまだ、不透明な部分があるが、現在決まっていることとして、3年間は展覧会を休止することを公表している。来年度は外回りの防水改修工事がメインになるので、館内の無料スペースで温湿度管理に影響を受けない彫刻作品等を展示し、一部の作品ではあるが鑑賞出来る状態を保ちたいと思っている。併せてアウトリーチ活動として、市内の公共施設でも彫刻作品や温湿度管理を比較的必要としないものを展示できるよう学芸の方で考えている。また、特定天井と空調工事の時期には恐らく全館休館をせざるを得ない期間があるため、その時期については、改めて公表することになると考えている。工事改修中の作品の保管については予算面も含め、現在庁内で調整中である。

館長： 美術館の一番大きな役割は作品の保全であるので、それを優先に置きつつアウトリーチあるいは館内で展示できる可能性について、具体的に詰めているところである。次回の部会では具体的なことを報告できるのではないかと思う。また、未定ではあるが、リニューアルオープンの際には大掛かりな岡本太郎展をしなくてはいけないと考えている。それまでの間、岡本太郎作品が全く見えないという期間がないよう、巡回展を含め色々検討している。

加藤委員： 休館の場合、巡回展を組むというのは割合あるが、貸倉庫のみではなくまとめて預かってくれるところがあればそこで公開をしてもらうということも考えられるのでは。

館長： 考えてはいるが、なかなかまとめて預かってもらうというのは難しい。色々な可能性がある中で、きちんとした作品保全のために必要な予算を取ることが重要なことであり、現在、調整しているところである。

加藤委員： それは、非常に重要なことで、休館が決して何もしないことではないということをしちんと理解してもらう必要がある。
教育プログラムについて、バスなどの交通手段の確保の問題は色々な所で共通する課題になってはいるところではあるが、逆に学校に出向いてプログラムを実施するという事はしているか。

事務局： 出張授業の案内はしている。ただ、現段階では展覧会を開催しているので来館する団体が多い。現在、中学校から出張授業の予約はある。

加藤委員： それは鑑賞授業か。現代作家と一緒に何かをするようなプログラムはしているか。

事務局： 鑑賞授業でもあるが、ワークショップのようなものも含んだプログラムである。現代作家とのプログラムは今までしたことはない。

加藤委員： 休館中のプログラムとしてそう言うこともできるではないか。自分が所属している美術館でも現在検討中である。

館長： 当館ではTARO賞の作家とのパイプがあるので比較的そういう展開はしやすいと思う。

- 館長： 美術館の工事に関して言うと、練馬の美術館が予算での業者確保の見通しが立たず、記者発表までした後に美術館が作れないという事態になっている。神奈川県民ホールギャラリーも壊すことは決定しているが、予算がなかなか取れないと聞いている。改修工事も資材費と人件費の高騰がありなかなか予算を持って進められないところがある。
- 今、どの館もそういう時期に来ていて、建て替えや補修工事の必要性から、休館を予定している館もあると聞く。ぜひそういうところと情報共有をしたいと思っているし、また、今後、貴館へも事務方からの個別の質問など出てくることもあるかと思うがぜひご協力をお願いしたい。
- 加藤委員： 同じ時期に休館する館で、休館中になにをどうやって進められるかということについては、協力して出来るかがあると思う。巡回展を組むにしても協力して共同の作品として企画できるので企画の幅も増えるのではないかな。
- 橋本部長： 子供たちにとって、工事休館期間は鑑賞の機会が失われる期間である。世田谷美術館では、AI の時代になり既視感満載になってしまっている子供たちに実物を見ることの大切さ、実際の作品とどう向き合わせるべきかということを考えて全小・中学校の鑑賞教室をやってきた。しかし、コロナ禍では実施出来ない期間が生じてしまった。救済措置としてコロナ禍明けに出来なかった期間の全学年の子どもたちを対象に鑑賞教室を行うという経験をしている。休館中の鑑賞教室の件では、予算の交渉も行っている。何か参考になることがあれば提供できる。また、学校との連携では、休館中に先生たちとの関係を切らさず結びつき続けられるかと、教育委員会とどのような可能性があるかを模索し事業に結び付けていくことが出来るか、ということも重要なことだと思う。
- 加藤委員： 例えば、大学で展示スペースを借りてそこを美術館の展示室として活用しお互いに共催していくというような形で、展示スペースとして活用出来るところがあるかを検討することも出来ると思う。
- 橋本部長： 11 月 1 日のイベントでは QD レーザの機器は使うか。
- 事務局： 今回のイベントでの使用はない。予算的に厳しい。先日、QD レーザの方と話す機会があり、休館明けになるが、何らかの形で企画が出来ないかとリクエストとしては伝えている。
- 橋本部長： 広報に関してはとても感心している。この調子で進めてもらいたい。資料の SNS の数字を見て驚いている。相当工夫しないとうまくいかないが、その成果が出ている。新しい客を開拓するという意味でも非常に役だっていると思う。